

比較言語学の課題と方法

— 蒙古語歴史・比較研究批判 —

はじめに

比較言語学の目的は、言語の歴史を行うことである。印欧比較言語学の権威アントワヌ・メイエ (A. Meillet) は、

「言語についてその歴史を明らかにするには、比較の方法がただ一つの可能な手段である。」⁽¹⁾と述べている。

言語の歴史とは、言語が蒙った変化にほかならない。時間の流れのなかで、言語は変化して止むことがない。そして変化は、言語の音韻、文法、語彙、文の構造、すべての領域に及ぶ。具体的には、言語の変化は言語を構

栗 林 均

成するそれら諸体系の要素——音韻、接辞、語尾、単語等——の変化としてあらわれる。すなわち、それらの要素があるいは消失し、あるいは他の要素と交替し、あるいはまた全く新しい要素が体系に組み込まれる現象が、それである。

言語の歴史を行う比較研究では、共通の起原をもった複数の言語状態（共時態）を比較する。それらは一国の標準語のように独立した言語の場合もあり、書きことばを持たない方言の場合もあり、あるいはまた過去の文献資料から引き出された言語状態の場合もありうる。比較を行う際の対象としては、それらのうちから任意の組み合わせが可能であるが、重要なことは、それらが共通の

起原に由来するということである。換言すれば、それらが互いに同系の関係にあることは、比較に際しての不可欠の要件である。言語史を行うための比較研究にとって(2)は起原を異にする言語を並べても、無意味である。

一 比較言語学と系統論

比較を行おうとする複数の言語間の同系関係の確かさによって、比較研究に二つの異なった分野を区別することができる。すなわち、狭義の比較言語学と、いわゆる系統論がそれである。

狭い意味での比較言語学では、複数の言語状態の詳細な比較に先立って、それらの同系関係はあらかじめ自明である。それは多くの場合、文法体系の緊密な一致ないし類似が共通の起原を仮定させずにはおかないことによる。この場合の比較研究のめざすところは、したがって、複数の言語状態が共通の起原からいかにして(どのよう(3)な道を通じて)それぞれの形をとるに至ったか、比較によって変化の詳細を明らかにすることである。

印欧諸言語の比較研究がまずもって比較文法として成立したことは興味深い。周知のように、印欧語比較研究

は、一八一六年にフランツ・ポップ(F. Popp)によって確かな基礎が据えられたとされている。(3)それは、ポップがこの年に出版した著作においてサンスクリット語、ギリシャ語、ラテン語、ペルシャ語、ゲルマン語の動詞活用体系を比較して、それらの類似が偶然によるものは決してありえないことを論証して、右の諸言語の同系関係に疑う余地がなくなったことによる。のちにはさらに、リトアニア語、ケルト語、アルバニア語、アルメニア語、スラブ語等の諸言語もこれと同系関係にあることが確認されるが、その際、「印欧語は形態法が複雑であるため、ある言語が印欧語であるか否かについては一々論証してかかる必要は殆んどな(5)かったのである。さらに、より最近では、

「トハリア語あるいはヒットタイト語のような未知の印欧語が発見された際にも、それらの印欧語的性格は、解説と解釈がはじまったその瞬間からすでに明らかであ(6)った。」

という。印欧比較言語学は、比較文法による同系関係の確認という確かな基礎の上に、それぞれの言語の先史時代の歴史の解明に専心して、その方法論的原理を開発し

たということができる。

これに対して、系統論では、同系関係が未だ一般に承認されていない言語間に同系関係を仮定して、比較によってそれを証明しようとする。そこでは狭義の比較言語学が同系諸言語間に確認した関係を、二言語間に見い出そうとする。したがって、方法的には系統論は狭義の比較言語学に全面的に依存している。一般に、複数の言語間に同系関係が確認されるためには、それらの間に「共通の起原を仮定してはじめて説明できる」ような、なんらかの緊密な関係が確認されることが必要である。

同系関係の確認の際に特に重要視されているのは音韻の領域における緊密な関係であるが、これは理由のないことではない。印欧比較言語学の長年にわたる経験は、言語の変化が決して恣意的で無秩序なものではなく、そこには一定の様式が存在することを明らかにした。これが印欧語以外の諸言語の比較研究にも適用される「比較方法」の成立するゆえんである。印欧比較言語学の獲得した方法論上の原理のなかでも、音韻変化の厳密な様式が確認されたことは最も重要な成果のひとつに数えられている。「音韻対応の規則性」あるいは俗に「音韻法則」

と呼ばれているこのような音韻変化の様式は、言語の文法が歴史的にいかに変化され、またいかに大量の語彙が入れ替わろうと、いやしくも比較される言語に、共通の起原を継承する (cognate) 単語が保存されている限り、それらを構成するすべての音韻について必ず成立して然るべき性質のものだからである。音韻対応の確立をもって同系関係の有力な証拠とみなされるのは、そのような厳密な関係こそ、共通の起原を仮定しなくては絶対に説明できないものだからである。

こうして、系統論では言語間の音韻対応の確認に何よりも力が注がれることになる。が、実際のところ、同系関係が自明の言語間においても音韻対応を確立することが決して容易なわざでないことはしばしば見逃されている。むしろ、音韻対応の詳細の解明は狭義の比較言語学の究極の目的ともいえるほど困難な課題である。付言すれば、二つの言語の間に意味と音形（多くは語頭音ないし語頭音節等単語の一部）の類似している単語を並べてみても、それは語彙の類似であって厳密な意味での「音韻対応」とは無縁である。音韻対応は、既に述べたように、同系のすべての単語について、さらにそれを構成す

るすべての音について成立すべき関係だからである。それは、ある言語に見い出される語と同系の語が他の言語でどのような形を持っていなければならないか予測を可能にするほどに厳密なものとして理解されねばならない。このように、文法体系の比較によってさえ同系関係の確認されない言語間に音韻対応を確認しようという試みはオプチミスチックに過ぎることはないであろうか。

複数の言語間に、右のような手続を経て同系関係が確立されるまでは、比較に提供される語彙の類似は、個別的にはいかにそれらしく見えようとも、ありうるあまたの可能性のひとつに過ぎない。それは、可能性としては、印欧語と中国語と日本語がはるかな過去に同系関係にあったことがいつの日が証明されるかも知れないという種類の可能性と本質的には変わらない。

狭義の比較言語学は比較方法の原理にのっとりて言語史を行なう場であるが、系統論はそのような場を確保することをめざす試みにすぎないのであって、同系関係の確立をもってその任務を終えることになる。

このような観点から蒙古語、満州・ツングース語、チュルク語等、いわゆるアルタイ諸言語をみると、それぞ

れの語族内部の諸言語の同系関係は疑いないものの、三語族どうし相互の同系関係は未だ確立されていないと言わざるを得ない。相互の言語間に見い出される著しい数の語彙の類似にもかかわらず、研究の現状ではアルタイ諸言語の比較は、なお系統論の領域に属するものである。したがって、われわれが確かな基盤の上に比較方法の原理を用いて言語史を行うことができるのは、蒙古語族、満州・ツングース語族、チュルク語族のそれぞれ内部の諸言語・諸方言の比較の分野である。

二 祖語と語族

蒙古語族は、共通の起原から分裂して、それを間断なく継承している諸言語および諸方言の総称である。それらの同系関係は、ほとんど証明を必要としないほど明らかである。なぜならそれらの言語間にみられる名詞曲用や動詞活用等の文法体系の合致はそれらが共通の起原に由来すると仮定することによってしか説明することができないからである。

蒙古語族のすべての諸言語・諸方言の共通の起原として仮定される言語を「蒙古祖語」と呼ぶ。ここで仮定さ

れる蒙古祖語は、したがって、比較されるべき蒙古祖語諸言語・諸方言の形式を余す所なく、一貫して、しかもできるだけ簡潔に説明するための理論的な要請である。

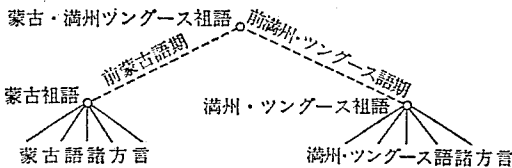
蒙古語比較言語学の課題は、蒙古語族の諸言語・諸方言を比較することによって、蒙古祖語からそれぞれへの変化（歴史）を明らかにすることである。さらに一定の条件が満たされれば、蒙古祖語以前の歴史を行うことも不可能ではないが、その手続きは、次に述べるように、蒙古語族内部の比較と混同されてはならない。

蒙古祖語以前の蒙古語の歴史は、第一に、蒙古語族と他の語族——たとえば満州・ツングース語族やチュルク語族との同系関係が確立されたときに可能となる。これら三語族間に同系関係が確認される、ということは、蒙古祖語、満州・ツングース祖語、およびチュルク祖語が、さらにより古い共通の起原（大祖語）に由来することが明らかになる、ということに他ならない。より古い大祖語からそれぞれの語族の祖語への変化がすなわち、各語族の祖語以前の歴史である。その時代をそれぞれ「前蒙古語期」「前満州・ツングース語期」「前チュルク語期」と呼ぶ⁽¹⁰⁾。

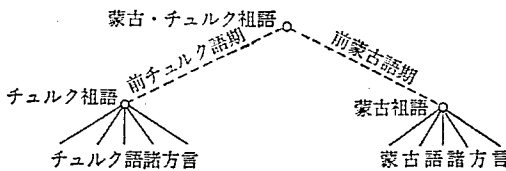
蒙古語族と同系関係の確立される蓋然性の最も大きいのは次の三通りの場合である。⁽¹¹⁾（左図を参照。破線は同系関係が確立していないことを示す。）

この方法によって蒙古祖語以前（「前蒙古語期」）の歴史を行うには、したがって（一）蒙古祖語の再建、および（二）蒙古語族と他の語族との同系関係の確立、が前提とされる。既に述べたように研究の現段階では、これを行うに足る確かな基盤は未だ据えられていない。

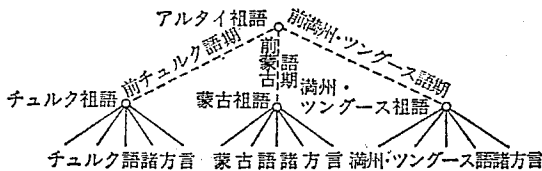
I. 蒙古・満州ツングース語族



II. 蒙古・チュルク語族



III. アルタイ語族



蒙古祖語以前の歴史を行なう第二の方法は、内的再構(internal reconstruction)である。ある言語状態内部における形態音素的交替は、しばしば、音韻変化によって生じたものである⁽¹²⁾。このような観点から、共時態としての蒙古祖語のうちに形態音素的な交替が見い出された場合、それがさらに古い時代の変化を反映している可能性が大きい。内的再構はひとつの言語状態内部の交替現象を扱うものである。

内的再構はしばらく措き、諸言語の比較によって蒙古語史を行う場合、蒙古祖語以降の歴史と、それ以前(前蒙古語期)の歴史とは、比較すべき対象言語が全く異なることになる。ひとつの語族はそれだけで独立した小宇宙であるという、イエルクスレウ(L. Hjelmstedt)の次の言葉は傾聴に価する。

「下位語族は大きな語族から独立している。ゲルマン語学者あるいはロマンス語学者は一つの閉じられた体系の中で仕事をする事ができ、その体系の中ではゲルマン語ないしロマンス語の共通公式(対応——引用者)が十分な仕事の道具であり、下位語族の境界を越えて、より大きな語族の他の成員まで眺める必要はな

い。…このようなまったく小さな語族、または語族の部分がすべてそれ自体、一つの小宇宙として、より大きな語族とまったく同じ方法で組織されている⁽¹³⁾。」

これを蒙古語比較言語学に適用すれば、蒙古祖語以降(蒙古祖語を含む)の歴史を行うのに、比較資料としては蒙古語族内部の諸言語・諸方言で十分であり、他の語族の資料を眺める必要はない、ということになる。ウラディーミルツォフ(B. Я. Владимирцов)の『蒙古文語とハルハ方言の比較文法』⁽¹⁴⁾は、蒙古語歴史・比較研究の金字塔であるにもかかわらず、この観点からは少なからず批判の余地があると考ええる。この著作では、蒙古文語の成立の基礎になったと仮定される一二三世紀の蒙古語の状態を、しばしば「チュルク語との対応」によって明らかにしようとしているのである。

たとえば、氏は一二三世紀の蒙古語に前寄りの*i*と後寄りの*ï*を推定しているが、その根拠のひとつに、一連の単語で蒙古文語の*i*とチュルク諸語の*ï*が「対応」していることをあげている⁽¹⁵⁾。あるいはまた、一二三世紀の蒙古語では、円唇広母音の*o*と*ö*は第一音節にのみあらわれ、第二音節以降にはもっぱら円唇狭母音の*u*と

びが現れていた、と推定しているが、そのひとつの根拠として、古代トルコ語諸方言ないしチュルク祖語(16)がそれと同じ母音組織をもっていたことをあげている。しかし、チュルク諸語の資料をもって蒙古祖語以降の蒙古語の歴史を照らすことはできないのである。蒙古文語の基礎になったと考えられる一二三世紀の蒙古語にしろ、それはたとえ蒙古祖語に近いものであったにしても、やはり蒙古祖語以降の歴史として扱われるべきことに変わりはない。

服部四郎氏は一九五九年に「蒙古祖語における母音の長さ」と題する論文を発表して、モングオール語の語頭音節に見い出される長母音が、蒙古祖語における長母音を保存している旨を論述された(17)。これに対して、ドルファー (G. Doerfer) は、服部論文が他のアルタイ諸語との関係を考慮していないことをもって説明不十分であると批判を呈している(18)。しかし、繰り返し返せば、蒙古祖語の再構にとって蒙古語族以外の語族を考慮する必要はまったく無いのである。こうして、ドルファー自身が右の批判論文の続編で、

「蒙古祖語における長母音の存在の問題は、アルタイ

諸語の同系関係の問題とは無関係にただそれだけで扱われる。」(19)

と述べるに至ったことは、歓迎すべき修正といえる。

三 語族内部の諸言語間の関係

服部四郎氏が譬喩的に述べているように、「蒙古語比較言語学は、蒙古文語と現代口語との比較に誕生した」(20)。蒙古文語は、一二三世紀のチングス汗の時代にウイグル文字をもって蒙古語を書き表すために作製された文字言語であって、以後七〇〇年以上にわたって蒙古民族の主要な書きことばとして用いられてきた。その綴りや語法には現代口語には見られない一連の古風な特徴が保持されており、それは多少なりとも蒙古文語成立当時（一二三世紀）の蒙古語の状態を反映していると考えられるのである。

フィンランドのアルタイ言語学者ラムステット (G. J. Ramstedt) は、ウルガ (現在のウランバートル) の蒙古語口語の調査にもとづき「蒙古文語とウルガ方言との比較音声学」(21) (一九〇三) を発表して蒙古語比較音声学の堅固な基礎を築いた。そこでは、蒙古文語成立当時の蒙

古語の音声的特徴をウルガ方言との比較によって推定し、前者から後者への変化を説明することが試みられたのである。ラムステットの比較研究はソ連邦の東洋学者ウラディーミルツォフに引き継がれて、大部の著作『蒙古文語とハルハ方言の比較文法』(一九二九)として実を結んだ。ウラディーミルツォフは書記言語としての蒙古文語に独自の発展を考察して蒙古語比較言語学に新しい視点を導入したが、蒙古文語の成立当時その基礎にあった蒙古語と現代口語(ハルハ方言)をやはり一つの言語の連続とみなしていた点はラムステットと同じである。氏の比較も前者から後者への変化の詳細を明らかにすることを目的としていたのである。

蒙古文語が現代口語の祖形を反映するというこのような立場に対して、日本ではつとに服部四郎氏が「文語形から口語形が生じたといふ根本思想が誤つてゐると信ずる⁽²²⁾」というように警鐘を発しているが、さきの立場は現代においてもポップェ(N. Poppe)に引き継がれて、次のような仮説として現われている。

「古期蒙古語(Ancient Mongolian)は、共通蒙古語(Common Mongolian)とはほとんど合致していた。蒙

古文語は音声的、形態的發展の観点から古期蒙古語をよく反映している⁽²³⁾。」

これによれば、蒙古文語は共通蒙古語(=蒙古祖語)とほぼ合致していて、蒙古語族の祖形をよく反映していることになる。

一般に、互いに同系関係にある二つの言語状態(A、B)が時代的に隔たつて見い出されるとき、それらの相互関係には次の二つの場合が考えられる。すなわち、第一はそれらが同じ方言の連続である場合(図1)であり、第二はそれらが互いに言語的連続をなさない二個の方言の場合(図2)である。図1で、AをBの祖語と呼ぶこともできるが、Aは比較対応の理論的要請である以前に、歴史的に文証される言語状態である点が特殊である。祖

図1

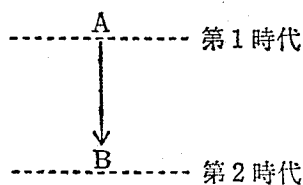
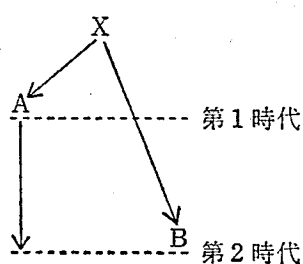


図2



語が書記記録によってとどめられている例はきわめて稀であるが、実際にそのような例が見い出せないわけではない。ロマンス語に対するラテン語はその最も有名なものである。

そして蒙古文語とハルハ(ハルハ)方言の比較に際して、ラムステットもウラディーミルツォフもそれらの関係を図1のモデルによって理解していたことは明らかである。蒙古文語(の基礎にあった方言)とハルハ方言とは、ちょうどラテン語(あるいは俗ラテン語)とイタリア語のように、一つの連続した言語の異なった時代のあらわれとして捉えられていたのである。

しかし、蒙古語の地理的拡張やその分布および分裂の歴史が必ずしも明らかでない以上、蒙古文語とハルハ方言の関係をそのようなものとしてアプリオリに受け容れるわけにはいかない。それらが同一方言の連続であるか、二個の方言であるかは、両者の比較によって対応の様式から決定されねばならないのである。両者の関係を明らかにするには、それらの比較による以外にない。この場合にも重視されるのは音韻の領域における対応である。

時代的に隔たった二つの言語状態(A、B)が同一方言

の連続である、というためには両者間の同系単語の間に、AからBへの変化としての音韻対応が余すところなく成り立たねばならない。「音韻対応の一定性」あるいは「音韻法則の規則性」は、同系諸語間の関係というよりはむしろ元来このような歴史的な音変化について述べたものである。A、B両言語の音韻対応に恣意的で無秩序な例外が多数見い出されるとき、多くの場合、それらに両者の収束点(祖語)を設けることによって解決することができる。つまり図2のモデルにより、祖語XからA、B両言語への独自の変化を仮定して、それぞれの言語状態を説明することになる。

ウラディーミルツォフの『比較文法』の最大の功績は、蒙古文語とハルハ方言の音韻対応とその例外を詳らかに示したことである。そして、その例外は、ウラディーミルツォフによれば図1のモデルの中で処理できるものとしてとらえられていたのであるが、これが氏の『比較文法』の最大の欠点の一つと考えられる。音韻対応の例外に対する認識の甘さは、そのまま「音韻対応の一定性」に対する無理解を露呈するものである。

たとえば、蒙古文語の「V+r+V」ないし「V+r

「+V」に対応して、ハルハ方言では母音間の子音(γとg)が消失して長母音があらわれている場合と、母音間の喉子音が保持されている場合の二通りがある。

蒙古文語 ハルハ方言

bayatur bātūr (英雄)

degere dēr (上に)

bara baḡā (小さい)

egem egēm (鎖骨)

このような対応を、ウラディーミルツォフは蒙古文語の状態からの「分岐的音変化」として説明している。氏によれば、母音間のγ、gが消失して長母音が生じる音韻変化が、一群の語に起らなかったのは、それらが特殊な意味をもつ語彙グループに属して使用頻度が違っていたためである、という⁽²⁴⁾。

ウラディーミルツォフの説明は「音韻対応の一定性」すなわち意味とは無関係に調音にのみ関して起こる変化の一定性の原則と相容れない性格のものである。この原則は、ブルームフィールド(L. Bloomfield)によって次のように明示的に述べられている。

「音声的变化は、任意の特定の言語形式の非音声的諸

因子——たとえば意味、頻度、同音異義等々——から独立のものである。⁽²⁵⁾」

現在では、さきに見た蒙古文語とハルハ方言の対応について二通りの主要な仮説が呈示されているが、いずれも蒙古文語の状態に反映されていない音声的特徴を仮定するものである。その一は、蒙古文語でγ、gとあらわされている子音に、元来、それぞれ音的に異なる二種類の区別があった(γ₁, γ₂, g₁, g₂)と仮定する⁽²⁶⁾。

*γ₁V, γ₂V < VV < V

*γ₁V, γ₂V < VV, V₀V

他はγ、gに後続する母音が、元来長母音であったと仮定する⁽²⁷⁾。

*V₀V, V₀V < VV < V

*V₀V, V₀V < VV, V₀V

いずれにしても、このような音韻対応と例外は、蒙古文語とハルハ方言の外に収束点を求めて説明されるべき性質のものと考えられる。

あるいは、そのような収束点を「蒙古文語の基礎にあった方言」に求めて、蒙古文語は正書法上の制約によってそのような特徴を表記し分けるすべがなかったという

考え方も可能であろう。しかし、そのような性質の「基礎にあった方言」というのは、歴史的現実というより、書記言語としての蒙古文語もそれに由来する理論的要請としての「祖語」とななら変わるところがない。

蒙古文語とハルハ方言（および現代諸方言）が言語的連続をなしているとみなした場合、蒙古文語では失われた祖語の特徴が現代口語に保持されている可能性はゼロである。実際は、右に見たように、今後の研究においても図2の発展の可能性を考慮に入れて比較を行うことが必要と思われる。

四 音韻変化の様式

前章でみたように、時代的に隔たった二つの言語状態が同一方言の連続である場合（A→B）、AとBの違いはすべてAからBへの変化として説明される。Bの祖語がすなわちAだからである。この章では、言語的連続をなさない同系の言語状態の音韻対応から祖語を再構する際の主要な手続きを検討することにする。

同系諸言語を比較して祖形を再構することができるのは、それぞれの言語が「その中に分化以前の時代の記憶

を程度の差こそあれ保有している」⁽²⁸⁾からに他ならない。逆に、祖語の特徴や対立が派生言語において一様に失われたとしたら、それらの比較によってもとの特徴や対立を明らかにすることはできない、ということになる。これは比較方法のひとつの限界を示すものといえよう。

ポツペは蒙古祖語に **nige* と **oge* の音連続を再構しているが、それらは蒙古語諸方言で次のように全く同じ母音としてあらわれている。⁽²⁹⁾

蒙古文語 *oge* || 中期蒙古語 *o'e* || ダグル語 *o* || モンゴル語 *o* || オルドス語 *o* || ハルハ語 *o* || ブリヤート語 *o*
|| カルムイク語 *o*

nige* と **oge* に関して氏が呈示した蒙古語諸方言の対応の唯一の違いは、nige* に関してモゴル語の対応が示されていないのに対して、**oge* のモゴル語のあらわれに *oa* が示されている点だけである。結局、氏は同系諸言語のいずれにも実証されない対立を祖語に **nige* と **oge* として仮定していることとなる。祖語の再建形式が同系諸言語間の対応を示す定式だとすれば、このような対応から浮き上がったポツペの「再建」が比較方法と相容れないものであることは明らかである。

祖語から分化した諸言語が言語変化を蒙る際の領域と程度は様々であって予断を許さない。互いに時代を隔てて見い出される複数の同系諸言語のなかでより古い時代に属する言語状態が必ずしもより多くの古風な特徴を保存しているとは限らない。より古い時代の言語状態に失われている祖語の特徴が、同系のより新しい時代に属する言語状態に見い出される例は枚挙にいとまがない。

また、全体的に古風な特徴をよく保存している言語であつても、その言語のうちのなんらかの特徴が他の同系諸言語から独自の変化を蒙っていることも稀ではない。これに関しては逆もまた真であつて、全体的に多くの変化を蒙っている言語にあつても、他の同系諸言語で失われた、祖語のなんらかの特徴を保存していることは充分にありうるのである。

服部四郎氏がモングオール語の語頭音節の長母音をもつて蒙古祖語の長母音を継承していると主張したことに對して、ドルファールはモングオール語が印欧語族におけるリトアニア語のように全体として古風な特徴をよく保持している言語でなく、むしろ全体として多大な変化を蒙った言語であることから、この言語の特徴をもつて祖

語再構の証拠とみなすことを意想外のこととした。⁽³⁰⁾確かにモングオール語は他の蒙古語にくらべて多くの点で独自の改新を経ており、その歴史を行うには種々の要素を考慮に入れる必要がある。しかし、この言語が他の蒙古語と同等に、祖語に對して独立の証拠を提供しうることに変わりはない。比較方法は「各語派または各言語が祖語の諸形式に對してそれぞれ独立に証拠となる」⁽³¹⁾ことを前提としているのである。これからドルファールの批判が当たらないことは明らかである。

ソシユール (F. de Saussure) が指摘しているように、ほとんどの音韻変化は一定の音声的条件のもとに生じる条件的変化である。⁽³²⁾これは、ある言語に見い出されるひとつの音がおしなべて変化を蒙ることが稀であることを示している。音韻変化は意味、使用頻度、同音異義のよ^{うな}非音声的因子からは独立しているが、音声的因子——語中に占める位置や他のいかなる音によつて囲まれているかの音声的環境、また音自体の微妙な異音的差異等——にはきわめて敏感であるといえよう。音韻変化が当該の音のすべてにあまねくわたっているようにみえるにしても、「それは条件の性格が隠れているか、一般的

にすぎるかにほかならないばあいがおおい⁽³³⁾のである。条件的変化は、ある音韻のうちで一定の音声的条件のもとにあるものだけが変化を蒙り他には及ばないことから、当該の音に分裂をもたらすことになる。ちなみに、同系言語間において一方の言語の二音(x)と他方の言語の二音(x, y)が対応している場合(x || x, x || y)そこには分岐的音変化と融合的音変化の二つの可能性が考えられる。分岐的变化は、祖語でひとつの音であったものが一方の言語で保たれ、他方では二つの音に分裂する変化を蒙ったもの。融合的变化は、逆に元来祖語の有していた二つの音の対立が一方で保存され、他方ではそれらが対立を失う変化を蒙ったものである。いずれの言語状態が祖語を反映しているかを推定するにあたって、われわれは「音の恣意的な分裂変化を排除する作業原則」に従う。つまり、ひとつの音がなんの条件もなく分裂するような音変化は考えられないのである⁽³⁴⁾。これは印欧比較言語学の長年の経験によって獲得された作業原則であり、われわれはこれを数学の公理のようにアプリオリに受け容れる。

右の原則を言い換えれば、同系言語間の二音(x)対

二音(x, y)の音韻対応が分岐的音変化によって生じたと言うためには、そこに分岐的变化を惹き起こしたならかの音声的条件を明らかにする必要があるということである。より古い時代の単純な母音体系が分裂発展して後世の複雑な母音体系が生じた、というような推定は、しばしば右の原則に無知であることから行われることが多い。印欧語の三母音起原説はこの原則が確認される過程で否定されたが、われわれに身近な例としては、チャムバレン(B. H. Chamberlain)の日本祖語三母音説もこのような誤りから生じたものであった⁽³⁵⁾。

最近、モンゴル人民共和国のトモルツェレン(Х. Төмөрцэцэг)と中国内蒙古のフグジルト(呼格吉勒图)両氏により、それぞれ蒙古古語のより古い状態に四母音⁽³⁶⁾ないし五母音⁽³⁷⁾を仮定する説が提起された。両氏の論証の続きは異なるが、いずれも右に述べた原則を考慮に入れないことは、遺憾とせねばならない。

五 比較方法の限界

—— 結びにかえて ——

同系諸言語の比較により、それらの対応から祖語を再

構して語族の歴史を推定する比較方法は言語史を行う際に決して万能ではない。その方法論上の制約によって、比較方法の推定する歴史と実際の歴史の現実の間に矛盾がさげられない場合が起りうるのである。われわれはロマンス諸語の比較によって再構されるロマンス祖語（俗ラテン語）と古典ラテン語が必ずしも一致しない場合があることを知っている。このような理論と現実の矛盾は何によって生ずるのであろうか？ ここでは比較研究の方法論的限界を検討して小論の結びに代えることとする。

なによりもまず、比較方法は言語の分裂による変化を扱うものである点を指摘しておかねばならない。この最も典型的なものは、ひとつの言語共同体が分裂し、あるいは分断される場合である。たとえばアフガニスタンのモゴール語は、蒙古語の話し手がそこに移住して他の蒙古族との関係が断たれたあと独自の発展をたどったことは明らかである。しかし、言語変化は必ずしも分裂によるものがすべてではない。これと並んで非常にしばしば見い出される変化は波状変化、つまり伝播によるものである。これは、標準語の普及の場合のように、文化的、政治的、商業的に優位に立つ地方の言語が周辺の地域に

採用されていくことによる変化である。まさに、分裂と伝播は、言語変化の主要な二つのタイプである。⁽³⁸⁾

伝播による変化は、周辺地域の言語の話し手が中央の言語の言語形式を模倣して在来の言語形式に置き換えていく過程である。これは畢竟、「方言的借用」である。しかもこれが大規模に行われて言語変化に至る。比較方法では借用語をあらかじめ比較の対象から除外していることは既に見た通りである（註の（2）を参照）。それは祖語について何ものをも語らないからである。比較方法は、祖語のきっぱりとした分裂と、分裂後の言語の独自の発展（不干渉）の仮定のうえに成り立っている。したがって、主要な言語変化が伝播によるような言語にあっては、比較方法をもって歴史を行うことに大きな限界があることになる。伝播による変化は方言学や方言地理学等他の方法をもって明らかにされねばならない。

つぎに、祖語から分化した同系諸言語が分裂後にそれぞれ独自に同じ変化を蒙った場合、比較方法はそのような並行的な変化を見究めることはできない。われわれは、前章において、同系諸言語で一樣に失われた祖語の特徴や対立が再構不可能であることを見た。これは並行的な

変化のひとつの場合にはかならない。書記記録による歴史は、このような同系言語間の互いに独立の並行的変化が実際にしばしば起っていることを証している。サピア (E. Sapir) は次のように書いている。

「方言分裂以前からのもっとも根本的な駆流の動力は、往々にして永く関係を絶たれた諸言語をして、やはり同一、またはいちじるしく同様の局面を経過させるような種類のものである。」⁽³⁹⁾

そのような、並行的な変化は、書記記録によらなから比較方法によっては知られることがなかったはずのものである。

最後に、比較研究は祖語における言語状態を均質的なものと仮定している。しかし、現実にはどのような言語にあっても地域的・社会的な変種が存在している。言語の分裂がそのような変種に萌芽を有していることはよりありそうに思われる。分化した言語において、そのような変種が継承されている場合、われわれはそれらを祖語の単一の形式に帰することができない。それらは和解不能な対応としてあらわれるからである。比較方法は、そのような和解不能な対応の存在を明らかにすることはでき

るが、それがどのような原因によるものか——祖語における地理的・社会的方言の変種か、話しことばと書きことばのような言語層による変種か、あるいは交替形か——を決定することはできない。

(1) A. Meillet, *La méthode comparative en linguistique historique*, Paris, 1966, p. 12. 泉井久之助訳『史的言語学における比較の方法』東京、一九七七、三二頁。

(2) 隣接する複数の言語間に見られる借用関係 (linguistic borrowing) や言語連合 (Sprachbund) 等、言語接触の問題は、「比較方法」の及ぶ範囲ではない。それらには、「比較方法」とは別の視点と方法による比較が必要である。

(3) A. Meillet, *Introduction à l'étude comparative des langues indo-européennes*, Paris, 1937^e, p. 457 f.

(4) *Ueber das Conjugationssystem der Sanskritsprache, in Vergleichung mit jenem der griechischen, lateinischen, persischen und germanischen Sprache, nebst Episoden des Ramajan und Mahabharat in genauen metrischen Uebersetzungen aus dem Originaltexte und einigen Abschnitten aus dem Veda's*, Frankfurt am Main, 1816.

(5) A. Meillet, *La méthode……*, p. 26. 前掲邦訳書五三頁。

(6) *Ibid.*

(7) これに対して「音韻法則」の例外が見い出されるにし

ても、それは決して恣意的で無秩序な性質のものでありえない。それらは、① papa, mama のような幼児語、② 呼びかけや日常挨拶語等の短縮的発音、③ 同化、異化、音位転換等による語形変化、④ 類推による語形変化、等により、あらかじめ除外されるか、しかるべく説明が与えられるべきである。cf. A. Meillet, *Introduction*……, pp. 27—29.

ちなみに青年文法学派の有名なテーゼ「音韻法則に例外なし」(Ausnahmslosigkeit der Lautgesetze) に述べられている「例外」は、右のような説明ではとらえきれない恣意的で無秩序なものを指しているものとして理解すべきである。

(8) 筆者はもちろん、語彙の類似を軽視するものでも、無視することを主張するものでもない。ただ、語彙の類似と音韻対応とは似て非なるもの、混同すべからざるものであることを強調しておきたい。

(9) 「蒙古祖語」(proto-Mongolian) のほか「共通蒙古語」(common Mongolian) もよくは「原蒙古語」(Urmongolisch) 等の名称がありうるが、実質は変わらなう。高津春繁『比較言語学』東京、一九五〇、二二頁を参照。

(10) このような「前〜語期」(pre-language) な言語状態をあらわすものでなく、変化の生じた期間をあらわすものであることは注意を要する。

(11) N. Poppe, *Introduction to Altaic Linguistics*, Wiesbaden, 1965, pp. 143—148.

(12) J. M. Anderson, *Structural Aspects of Language Change*, London, 1973, p. 71.

(13) T. イエルクスレウ著、下宮忠雄・家村睦夫共訳『言語学入門』東京、一九六八、三四—三五頁。

(14) B. Я. Владимирцов 《Сравнительная грамматика монгольского письменного языка и халхаского наречия, Введение и фонетика》 Ленинград, 1925.

(15) Владимирцов, указ. соч., стр. 171—173.

(16) Владимирцов, указ. соч., стр. 315—319.

(17) 服部四郎「蒙古祖語の母音の長さ」『言語研究』三六号、一九五九、四〇—五四頁。これは、Shiro Hattoni "The length of vowels in Proto-Mongol" *Studia Mongolica Instituti Linguae et Litterarum Comitati Scientiarum et Educationis Altae Reipublicae Populi Mongoli*, tomus I, fasciculus 12, Ulaanbatar, 1959. の和訳増補版である。

。

(81) G. Doerfer "Langvokale im Urmongolischen?" *Journal de la Société Finno-ougrienne* 65, 1964, pp. 6—8.

(19) G. Doerfer "Langvokale im Urmongolischen? II" *Journal de la Société Finno-ougrienne* 70, 1970, p. 3.

(20) 服部四郎「蒙古語の口語と文語」『蒙古学報』第二号、一九四一、一八—三頁。

(21) G. J. Ramstedt, "Das Schriftmongolische und die

- Urmundart phonetisch verglichen" *Journal de la Société Finno-ougrienne*, XX: 2, 1903.
- (22) 服部四郎「前掲註(20)の論文一七九頁。
- (23) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Mémoires de la Société Finno-ougrienne 110, Helsinki, 1955, p. 15.
- (24) Владимирцов, указ. соч., стр. 231—232.
- (25) L. Bloomfield, *Language*, New York, 1933, pp. 353—354. 三浦誠・日野資純訳『言語』東京一九六五、四六三頁。
- (26) G. Doerfer, "Klassifikation und Verbreitung der mongolischen Sprachen" *Handbuch der Orientalistik*, I Abt., V Band, II Abschnitt: *Mongolisch*, Leiden/Köln, 1964, S. 35—36.
- G. I. M. Clauson, *Turkisch and Mongolian Studies*, London, 1962, pp. 196—198.
- (27) 服部四郎「蒙古祖語の母音の長短」『言語研究』三六号、一九五九、四〇—五四頁。
- N. Poppe, "On the Velar Stops in Intervocalic Position in Mongolian" *Ural-Altaische Jahrbücher* 31, 1959, pp. 270—273.
- (28) 高津春繁『比較言語学』東京一九五〇、二二二頁。
- (29) N. Poppe, *Introduction to Mongolian Comparative Studies*, Helsinki, 1955, p. 72 f.
- (30) G. Doerfer, "Langvokale im Urmongolischen?" *Journal de la Société Finno-ougrienne* 65, 1964, p. 6.
- (31) Bloomfield, *op. cit.*, p. 310.
- (32) F. de Saussure, *Cours de Linguistique Générale*, Paris, 1916, p. 199. 小林英夫訳『一般言語学講義』東京一九七二、一一〇三頁。
- (33) *Ibid.*
- (34) A. Meillet, *Introduction*……, p. 472.
- (35) 服部四郎「日本祖語について・1」『月刊言語』第七卷第一号、一九七八、六六一—七四頁。
- (36) Ж. Төмөрүрэн, "Из истории монгольского вокализма" *Studia Mongolica* Tom. III (11) Fasc. 14, 1975, pp. 229—237.
- (37) 呼格吉勒图「蒙古語族語言基本元音的比較」提要」『内蒙古大学学报』哲学社会科学蒙文版、一九八二年第三期、二九七—三〇四頁。
- (38) L. Bloomfield, *op. cit.*, p. 318.
- (39) E. Sapir, *Language*, An *Introduction to the Study of Speech*, 1921, p. 172. 泉井久之助訳『言語』東京一九五七、一七五頁。
- (一九八三・三・一〇・一橋大学助手)